

「縁・えにし」のよろこび

〜秋季・彼岸会〜

ひがんえ
 今年の9月16日～18日に彼岸会をお勤めしました。彼岸入り前にも関わらず、たくさんのお参りをいただきました。ご講師には、二木文生師（山口県下関市・光善寺）をお迎えし、お取り次ぎをいただきました。ご講師は、副住職が『法水会』という布教の研究会でお世話になっている先輩です。法水（ナムアマダブツ）に浸った3日間でした。

〜秋の仏教婦人会法座〜

今年の11月4日に開座しました。三役員さんと各地区役員さんが、朝から参拝者全員分のお齋を準備され、参拝の皆さんが「美味しかった！」と喜ばれていました。味はもちろんですが、盛り付けられた色とりどりの一品一品に感動されていました。講師は、副住職が勤めました。ご門徒皆さまのお育てに、感謝の思いでいっぱいです。



講師：福間 義朝師

〜親鸞聖人・報恩講（754回忌）〜

しんらんしょうにん ほうおんこう
 今年の11月26日～28日、親鸞聖人のご仏事をお勤めしました。ご講師に、福間義朝師（広島県三原市・教専寺）をお迎えし、阿弥陀さまのお慈悲のおこころを頂戴しました。ご講師は、布教伝道の第一線でご活躍され、全国各地に先生を慕う布教使がたくさんおられます。副住職もその一人です。雅楽の音色の中、親鸞聖人との出遇いをよろこぶ、感動の法要でした。

あみだれしび…今回は「報恩講」とは

「報恩講」は、浄土真宗のみ教えをいただく私たちにとって、浄土真宗をひらかれた親鸞聖人のご遺徳を偲び、感謝しつつお勤めされる、もっとも大切な法要です。

（中略）『歎異抄』は、親鸞聖人が「亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません」とおっしゃったと伝えています。そう聞くと、「親鸞聖人は親不孝だったの？」と思われる方がおられるかも知れませんが、そうではありません。『歎異抄』には、続けて「というのは、命のあるものはすべてみな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです」と記されています。

確かにお父さん、お母さんこそが、直接に私に命をくださった方かも知れませんが、命の連続の中で考えるなら、すべての命がつながっているのです。私たちは、お米や野菜、お肉やお魚などの命をいただいておりますが、それらの多くの命もどこかで私の家族だったかも知れないのです。

このように、多くの命のつながりと、私の命の落ち着き先である浄土への道を示し、今の私を支えてくださる「畢竟依」(究極の依りどころ)を示してくださったのが親鸞聖人でした。ですから私たちの先人は、親鸞聖人のご法事である「報恩講」を最も大切にし、その中で、すべての命へと感謝してきたのです。…

（『報恩講をご縁に②リーフレット・本願寺発行』）

阿弥陀さまからのお手紙

『ごんごんごん』

朝倉市・浄覚寺

渡邊 崇之

「かいとうげ」―このような名前をお聞きになったことはありませんか？

「かいとうげ」とは、漢字で『海(うみ)』『藤(ふじ)』『花(はな)』と書き、文字通り海に咲く藤の花と言われています。真つ暗な海の中で、藤の花のように綺麗(きれい)な房(ふさ)となつて真つ白に輝く、安らかに揺れる花。想像するだけでも実に美しいですね。

実は、この花とはタコの卵のことなんです。お母さんダコは卵を産む時、体内からとがった口のような漏斗(ろうとう)を出し、その漏斗から少しずつ卵を生み出します。その卵には糸のようなものがついており、お母さんダコはそれを絡めながら、房の形に編んでいくのです。その様子があまりにも美しく、藤の花のようなので、「海藤花(かいとうげ)」とよばれているのだそうです。

海の中というのは真つ暗闇です。しかも、たくさんのお敵がウヨウヨとしています。そんな中に、お母さんダコは真つ白に輝く新しい生命(いのち)を少しづつ産卵するのです。そしてこの美しい生命を卵から孵化(ふか)させるためだけに、この新しい生命のためだけに、この赤ちゃんたちのために、お母さんダコは一月月以上の間、卵から離れず、いつもいつもそばに寄り添うのです。一切何も口にせず、自らの体重を十分の一まで減らしながらも、赤ちゃんたちを護り通すのです。そればかりではありません。この

期間休むことなく、卵に新鮮な海水を与え、付着するゴミを取つてあげながら、自らの生命を投げて卵を護(まも)り続けるのです。

やがてタコの赤ちゃんたちは、卵から孵(かえ)り巣立っていきます。その真つ暗闇の海の中、卵から孵(かえ)った赤ちゃんたちは、フワフワと泳いでいる、その傍(かたわ)らでは、痩せ細ったお母さんダコは安心したかのように静かに死んでいくのです。お母さんダコは、まさに生命をかけて子育てをしているのです。それほどまでに深い愛情を持ち、ずつとずつと一緒にいるのです。

タコの赤ちゃんたちは何にも知らないのです。自分が生まれてくる前から、自分のことだけを案じ、自分だけのために「苦勞(くろう)くださったお母さんがいたことを。それでも、お母さんは構わないのです。赤ちゃんたちのことが、心配で心配でたまらないのです。そのため、とうとう自分の生命まで投げ出してしまつたのです。お母さんダコに、親心(おんこころ)というものを教えられます。「何としても、お前(まへ)たちに巣立(すだて)ってほしい。お前(まへ)たちが巣立(すだて)ってこれなくては、私はお前(まへ)たちの母親であることができない。一歩も離れないぞ、一歩たりとも離れることなどできないぞ」という、お母さんダコ(の親心)が伝わってまいります。

阿弥陀さまとは、そのような仏さまであられました。私が生まれてくる前から、私一人のことを案じ、私一人のために「苦勞(くろう)くださった仏さまなのでした。私のことが心配で心配でたまらない阿弥陀さまなのでした。

「お前を必ず救うてみせる。一人にはさせぬぞ。必ずやおさとり(おさとり)の仏さまにするからな」と、とうとうこの娑婆(しゃば)世界にその全生命を投げ出されたのでした。その投げ出されたおすがたが、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」の声のおす

がたなのです。南無阿弥陀仏とは、この私のことを心配で心配でたまらない阿弥陀さまが、この娑婆世界にその全生命を投げ出されたおすがたなのでした。

阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏の声の仏さまとなつて、いつもいつもこの私を案じてくださっているのです。「起きているときも、眠りにつくときも、目が覚めたときも、いつもいつも腕の中に抱きとつてどんなことがあつても離(はな)さぬぞよ」と、撰(おき)め取つてくださっていたのでした。濁(にご)りきつた日暮(ひぐし)しの現場(げんば)で、自分中心の思いに生き、その濁(にご)りの中(なか)にあることさえも気づかず、争(あらそ)い、苦(くる)しみ、憎(にく)み、悲(かな)しみ。そんな私を悲(かな)しまれ、慈(あは)れされた阿弥陀さまが全生命を投げ出して、南無阿弥陀仏となつてくださっていたのでした。「お前を救(た)わなければ、この私も救(た)われない！」とお前(まへ)を救(た)わなければ、この私も救(た)われない！」と、お誓(ちか)いくださっていたのでした。

そのお誓(ちか)いが、『仏説無量寿經(ぶつせつむりょうじゆきやう)』に「若(わか)く不生(ふ)ず取(と)正(ただ)覚(かく)にやくふしようじやふしゆしようかく」というお言葉となつて現(あら)われているのです。「若(わか)く不生(ふ)ず取(と)正(ただ)覚(かく)にやくふ」というお誓(ちか)いのお心(こころ)は、「お前(まへ)を救(た)わなければ、この私も救(た)われない！」という、阿弥陀さまの親心(おんこころ)のありつたけなひでした。その親心(おんこころ)のありつたけが、今(いま)もうすで、私の身に満(み)ちてくださって下さる南無阿弥陀仏は、阿弥陀さまの親心(おんこころ)のありつたけでありました。

いつもいつも「一緒(いっしょ)くださる阿弥陀さまでありました。」

※この法話を書かれた渡邊崇之師は、今度の永代経法要(4月25〜27日)のご講師です。

『みほとけとおもに・第6巻より』